心ゆたかに

三芳町立藤久保中学校　学校だより　第６号
学校教育目標
「進取果敢～自ら学び、挑み、未来を拓く生徒～」
令和8年10月15日(木)発行 文責 菅谷 和孝

HP

未来へ繋ぐ絆

校長　菅谷和孝

大正 6(1917)年、京都の三条大橋から東京の上野不忍池までの東海道を舞台に始まった「駅伝(EKIDEN)」は、一本の布(タスキ)に仲間への思いと情熱を託して繋いでいく、日本発祥の伝統的なスポーツです。かつて情報を伝達するためのシステムであった「駅制」に由来するこの競技は、単に速さを競うだけでなく、人から人へと思いを手渡していく美しい文化として、今や世界中で親しまれています。我が藤久保中学校においても、駅伝の歴史は特別な誇りとともに深く刻まれています。特に、平成元年から始まった埼玉県駅伝競走大会の中学生女子の部において達成された「見事な 3 連覇」という偉業は、本校の輝かしい歴史の金字塔であり、今なお色あせることのない誇りです。先輩たちが泥臭く、そして美しく繋いできたその情熱と魂は、かつて箱根駅伝の舞台を駆け抜けた卒業生たちへと受け継がれ、今日に至るまで「藤中スピリッツ」の原点として、私たちの心の中に脈々と生き続けています。

昨日(10/14)、秋晴れの空のもとで執り行われた駅伝競走大会の入間郡予選会において、藤久保中学校のプライドを胸に風を切って駆け抜けた選手たちは、まさに記憶と記録に残る素晴らしい走りを見せてくれました。事前のアドバイスとして、私は選手たちに「タスキの重さを感じるな。ただ、自分の目の前の1メートルに集中し、仲間が繋いできた熱量を自分の推進力に変えて、思い切り前へ踏み出そう。さぁ限界のその先へ！」と伝えました。その言葉を胸にスタートラインに立った選手たちは、己の限界を超えるためにと、強い眼差しでコースへと躍り出ました。

女子の部(5 区間)では、序盤から自身のペースをブレさせることなく、1 秒でも速く次の走者へタスキを渡そうと 1 秒を削り出す攻めの走りを貫いていました。全員が力を出し切り、見事に入間郡 5 位を果たしました。また、男子の部(6 区間)では、長丁場の展開の中で前を走る背中を真っ直ぐに見据え、「追いつく」のではなく「飲み込む」という強い意志を持って挑み続けました。手に汗握る展開の末、見事な入間郡 3 位入賞を果たし、さらには 4 区と 6 区において圧巻の区間賞を獲得するという快挙も成し遂げてくれました。

しかし、この輝かしい成果は、決して実際にコースを走った選手たちだけの力によって打ち立てられたものではありません。夏休み前から校内セレクトチームとして結成され、猛暑の中でも互いに励まし合いながら厳しい練習を重ねてきた、すべての仲間の存在があったからこそです。今回、惜しくも控えに回ることになったメンバーは、タイムの計測や走者への適切なアドバイス、ウォーミングアップの綿密な付き添い、そして沿道やグラウンドから声をからして送った必死の応援など、指示されたこと以上のサポートを自ら考え、判断し、行動してくれました。

陸上の世界には「走るのは選手だが、勝たせるのはチームの空気だ」という有名な言葉があります。応援の声や心のこもったサポートの一歩一歩が、苦しさの限界に達した選手の背中を押し、確実にタイムを縮めさせました。選手、サポートメンバー、そして熱心に指導に当たった監督・コーチ陣、さらには日頃の練習から応援してくださった先生方、温かい支援をいただいた保護者の皆様の存在があり、同じ高い目標に向かってかけがえのない時間を共有した「最高のチームワーク」があったからこそ、昨年度の記録を大きく上回る最高の走りが生まれたのだと確信しています。

駅伝におけるタスキとは、決して誰かに頼ってゴールに逃げ込むためのものではなく、関わってくれているすべての人の思いや願いをしっかりと託しながら繋いでいくものです。そして、これは私たち藤久保中学校が大切に守り、育んできた伝統のあり方と全く同じです。いま、298 名の全校生徒たち、温かく見守ってくださる保護者の皆様、情熱をもって指導に当たる教職員、そして日頃から学校を支えてくださる地域の方々と共に、未来へ向かって藤久保中学校のタスキを繋いでいくこと。その大切な瞬間こそが、まさに「今」この時なのだと感じています。

「誰かのためにと思えた時、人は強くなる」

今回の駅伝大会を通じて、私は生徒たちの逞しい走りや互いを思いやる姿から、この真理を改めて再確認させてもらいました。自分のためだけに走る力には限界がありますが、仲間の顔が浮かんだ時、支えてくれた人の思いを感じた時、人は己の限界の壁を破り、新しい自分へと生まれ変わることができます。

今年度のセレクトチームとしての活動は今大会をもって解散となりますが、この夏から秋にかけて全員で駆け抜けた熱量と共有した時間は、決して消えることはありません。このかけがえのない経験は、次年度のメンバーが新たな道を切り拓いていってくれるための力強いきっかけとなり、道標となっていくはずです。全力を尽くし切った選手とサポートの皆さん、そして温かいご声援とご理解をいただいたすべての皆様に、心から感謝いたします。
応援ありがとうございました。

